美術教育における基礎指導

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/32202

美術教育における基礎指導

北　浜　　淳

Ⅰ　研究目的

図画工作科や美術科が，一般には実際にどのように運営されているかは，その調査を指導者の側から行うことが多かった。本学部の学生について，教科に関する専門研究ならびに教材研究の担当をしていて，大学に入るまでにどのような状況の中で育ってきたかを理解する必要が感じられた。この教科が他教科に比して著るしく異なる点は，他人の考え方や他人のしかたではなく，別な結果や異質なものであることが期待されていることである。共通理解の必要な部面や，共通に持つべき技能も勿論他教科に劣らずあるのだが，この面は又甚だしく忘却されているようにも思われる。ともあれ，児童生徒のこの教科への取組み方には個人差があまりにも大きいといえる。義務教育の中での一教科として，その目標にも，具体的運営面にも詳細に述べられていながら，実際となるとこの教科ほど差異の多大なものも類例のないことであろう。地方の実状に即して運営するということを，同一の教材についても各種各様の授業法を考案していくことが期待されるため，幅ひろいこうしたあり方がかえって目的達成への度合を弱めているのではないだろうか。中学校では技術・家庭との関連において，基本的な技能においてもより明確に区分される。高校，大学と上級に進むにはこのような能力にはほとんど関係なく選ばれる状況であるから，本学部学生にもこの教科における能力を期待するほうがむりなのであろうが，むしろはげしい入学競争の場合にあっては，軽視してきているのではあるまいかとさえ思われるふしがある。学生の答は率直で，理解力や思考力にすぐれており，明快である。体験の記憶にもとづく部面では特に印象深いものに要約される長所がある。戦後の教育の中では児童生徒の自主性や自発性を強調するあまり，干渉することは勿論いけないだろうが，教えることさえいけないとして，自由創造を誇張した思潮が久しく続けられ，ために表現能力を高めるための基礎指導はなされないことが多く，放任とさえ思われるものもあった。本来技能教科として発展してきたこの教科の特質は，今日においてもその究極の目標として情操を高めるためにも絶対に必要で，重要なことは基礎指導の問題であり，その具体的な内容の研究である。実際の教育活動の展開に役立つものにするためには具体的な事実にもとづいて考察を加えねばならないと思う。

Ⅱ　調　　査

調査　A

(1)　あなたは次の流派の中でもっとも関心の深いものはどれか。

Fauvisme
Abstraction
Cubisme
Post-Impressionisme
Purisme
Sur-réalisme
Impressionisme
Neo-Impressionisme
Expressionisme
Naturalisme
Futurism
Constructivism

(2)　あなたは制作する場合次のどのものを中心にしているか。

形象が中心になる

色彩が中心になる
構成が中心になる

(3) 絵画のうちでは次のどの種類のものが好きか。
風景
人物
静物
抽象

(4) あなたは美術制作に際して，次のどの手段による傾向が多いか。
記憶をたどって
物語の内容
空想による
写実による

(1)の結果（調査人員124名に対する百分比）

Impressionisme	31
Naturalism	29
Post-Impressionisme	13
Sur-réalisme	11
Fauvisme	4
Costructivism	4
Abstraction	2
Expressionisme	2
Purisme	2
Futurism	2
Cubisme	0
Neo-Impressionisme	0

(2)の項目については

色彩中心	46
構成中心	36
形象中心	18

(3)の項目については

風景	44
人物	25
静物	18
抽象	13

(4)の項目については

写実	75
物語	13
空想	8
記憶	4

調査 B

内容と技法との関係についてどう考えるか。

∘作品個有の特徴は，作者の考えや美的感覚をも表わしていること，技法をよく観察し，時代もよく考える。

∘その内容を自己の命ずるままの方法をとるようにすることが大切なので，技法一般というとではない。内容にふさわしい技法ということ。

∘作品の中にみられる内容が，直観的に鑑賞者に迫ってくるような技法，つまり内容と技法とが密接に結びついていることが必要である。児童教育に際しては，あるテーマを与え，それをもっとも効果的に表現したらよいかを考えさせたり，実行させること。

∘表現する内容にもっとも適した技法を用いることと，そのためにはいろいろな表現法を実際に体験しておくことが必要である。

∘作者の意図が観るものによく伝わってくるものが大切である。

∘技法はあくまで自分を表現する手段である。内容がなければいろいろな技法をとり入れたとしても無意味である。また表わしたいことがどんなに立派なことでも具体的に表現するすべをしらなければ作品はできない。表現内容を適確に表わす技法そのことがすぐれた作品を生む鍵である。

∘あふれんばかりの内容をもちながら技法の未熟さから全てを表現できないことがしばしばある。心に感じたことをすぐ表現できるような訓練が日頃から必要である。そのとき心に感じたことを素直に表現すればよいのであって，技巧的になることはない。

∘技術ばかりがすぐれていてもよい作品とはいえない。内容と技術とのバランスがとれていなければならない。又内容ばかりであっても技術が下手であれば，その作品は満足できないと思う。

∘芸術は作家その人の人間性の問題であると思

う。芸術品が魂の告白であるとすれば，必ず誰かに何かを訴えるはずである。技法はその役目を果すために適切であることが必要になる。

調査　C

自分の受けた教科学習の状況について

○きちんと描くようにいわれ，きちんと描けるものばかりがほめられることに疑をもっていたので，絵画のことに対しては，関心がうすれていくばかりとなっていったようである。絵には感動の中心があってもよいはずで，木が大きいと思ったらうんと大きくかくとか，友だちの口もとがいいと思ったら，はっきりかくとかするようにすることである。工作のときも糊がうまくくっつかなくて，根気のないために，ほうりだしたくなることがしばしばであったし，もっと大きなものを作れたらよいと思ったが，画用紙大のボール紙一枚とか100グラムの粘土くらいが与えられるのでは，自分の好きなものを作りなさいといわれても，困惑してしまったものである。

○教師の性格により，判断の差があり，先生と生徒があわないときにはみとめられないので熱心にはなれず，教師が変ってから性格があい，一生けんめいかいたときはみとめてくれ，熱心にやらないものは認めてはくれないことが多かった。認めてくれれば子供心にも嬉しく興味も湧いてこの科目が好きになった。中学に入ってからは美術の担当教師には認めて貰えなかったが，私は私の絵を描いて楽しんでいた。

○机ぐらいの大きさの板に版画のけずりを入れていくのは子供心に楽しかったし，すり上った作品をみるのにも興味があった。又，一本の木片をペーパーナイフに仕上げたことによって，他の教科とちがった印象がある。

○包装紙や，布片や，チョコレートの金紙や銀紙で，いろいろと動物や植物，それに空想的な生物を作るという創造的なものであった。夢の中に出てくるような白鳥のようなものを作って，先生からほめられたので，絵を描いたり，作ったりすることや，種々の材料を使って変化のあるものを作ることに興味を覚えた。

○小学校では，実習がつねで，理解のための話や鑑賞もなかった。時間的には家へもって帰ってさせられたりしたことがあったから，もう少し時間が多いほうがよかったのではないかと思う。

○表現の喜び，創造のすばらしさを味わえないような自分であったことに気づいて寂しくなる。小学校の芸術教育は，ひとりひとりの人間がもっている様々な能力を発達させ，全面発達の人間を育てていくのに，とても大切だと思う。5年生になるまでにいつのまにか，こぎれいな，ぬり絵的なまとまった絵をかいていた。そうすれば先生はよい評点をくれ，別の先生に受け持たれるようになって，とたんに悪い評点をつけられたため，どう表現したらよいのか苦痛になりだした。どうしたらひとりひとりの子供が創造的表現をし，鑑賞する喜びを味わえる人間を育てる教育ができるかを研究したい。

○図画工作の授業でいろいろなことをしてきたが，指導を受けたという感じは全くなかったように思う。とにかく自分の好きなように何もわからずにかいたり，つくったりしていた。なかなかうまくできず，友達のをみて羨やましく思ったりしていた。水彩絵具など使い方には指導がなく，苦労しても思うように水彩画がかけなかったと思う。鑑賞についてもその指導についての記憶がない。

○小学校のときは，一貫して個性よりも上手，下手で評価がなされていたと思う。だからどうしても，人のまねをしたような絵ばかり描いていたような気がする。遠近法の話をきいてから，長い廊下の絵をかいた。誰がかいても同じもののようであったが，その中の何枚かが貼り出されていたので，遠近法を理解するためであったろうが，何かはり出されたものに嘘があるような気がする。

○よく写生にいったことをおもい出す。校内写生大会，クラス毎の写生などいろいろな機会があった。遠近とか，構図とか，色彩，色のぬり方など日頃全く気にかけていなかったことを指

摘されると，大へんうれしく有難かったものである。

○幼稚園時代はけっこう気ままに絵を描いて楽しんでいたらしいが，小学校になるといつのまにか大きらいな科目になってしまった。両親が心配して塾に通わせたこともある。このことがさらに苦痛を増したので，長くは続かず，今でも大きらいという感じが残っている。表現活動はかくの如くであったが，鑑賞は決してきらいではなく，むしろ進んで美術館へ行ったり，美術全集をみたりしていて楽しんでいる。このアンバランスはやはり今までの美術教育の欠陥であると思う。

○写生に関してだけは上手といえないまでも別に抵抗なく描けるようになった。これは小学校5年生の頃の友だちの一人が個有色ばかりでなく光の変化で色の変ることを話してくれたので，そのようにしたら，先生からほめられたことがあり，絵具の使用がよくなったからである。一方自分で考えたり，想ったりして描けないのである。

○3年生のときフロッタージュによるデザインをしたことをよく憶えている。又，春や秋には外の写生をよくしたと思う。絵の描き方については説明はなく，児童作品の紹介がおもだった°高学年になって，人形劇につかう頭の部分を各自につくらせて，各自が出来上ったものを使って一人ずつ教卓のところで，話をさせられたことがあったが，恥かしいことであったけれども，おもしろいと思った。

○小学校において一番印象深いのは何といっても評価であった。当時の絵日記をみると，いかにも子供らしく心に写ったものを大きく描き表わすいき方で，事物に忠実なものである。それでだろうと思うが，良い点をとっていたように思う。中学校の頃は自分では独創的なものができずきらいになるくらいだったが，先生は他教科との成績のバランスによって点をつけてくれたのであろうと思うくらいである。いつもの先生が厚塗りのいき方を教えていたので，あるとき代理にきた先生から酷評され，それからは不信の時代が続いてしまった。先生の好みにあわせようと努力するようになったし，又絵をかくこともきらいになってしまった。

○下描きを消したり描いたりしている間に授業の時間が終り頃になり，あわてて10分くらい絵具を塗ることにしたが，うまくできるはずはなかった。皆と一緒に貼られると一そうはずかしく評点のわるいのも，ますますきらいになった原因でもある。家で自分でいろいろ考えて作る工作は楽しかったし面白いと思ったが，学校でするときにはおもしろくなかったように記憶している。

○小学生のとき焼きものをしたことがあり，水彩画も好きだった。校庭に残してきた大きなセメント像の共同制作は楽しい思い出である。なんとなく型にはまった中学時代の感じがあるので高校に入ってからも選択に美術はとらなかった。

○遊びに共通するものが多かったように思う。潜望鏡を作ったり，くず入れを作ったり，紙をきっていろいろな形を作ったこと等を思い出す。自分で考えて作ったものにはあまり自信が持てず，できばえにもずい分幅があったように覚えている。強制された風景画などかく時にはとても仕事がすすまなかったようである。

○自分なりの絵をかこうというよりは，皆からみとめられるうまい絵，きれいな絵にしようという気持が強く，小学校5年生のとき，自分の意図に反してにごった色彩の絵になってがっかりしていたのに，先生が皆の前でその絵の色彩について大へんほめたのにびっくりしたことがあった。自他ともにうまいはずと思うようになってしまってからは，そんな意識が一そう絵をかくことを一種の苦痛をともなうものにして来た。絵をかくのは，うまくかければという意識と結びついてきた。鑑賞の教育がなかったように思う。

○幼稚園のころは好きだったのに，小学校では嫌になっていた。母が若い頃には絵を描いていたので，学校でかいた絵を持って帰るとそのたびに，ここが悪いあこが悪いと批評したり，注

文をつけたりした。学校の先生からせっかくマルを何重にもつけてもらったのに，母からけなされたことが多く，そのためにだんだん嫌になっていったのかもしれない。しかし嫌なわりには他の教科のときよりも解放されたような気持ちになっていたように思う。作品を貼り出されるのが一番嬉しかった。石けんを彫って人の顔をつくったことがあったが，天気のよい日で，運動場の好きな場所へ行って彫ってきてよいといわれた。写生にいったときとまたちがって非常にたのしかった。小学校では風景や静物の写生が多かったが，そんなものよりはデザイン的なイメージを絵にする教材がもっと多いとよかったと思う。

○「みえるままによくみてスケッチしてごらん」といわれ練習すると遠近や大小に注意してよくあらわれるようにしていると，先生からたいへんほめられ，自信がつくようになった。自然のつぶやきや家のどっしりとした様子などや田園ののどかな感じなど気がつくようになり，展覧会で受賞したりした。

○3年生頃までは楽しみながら描いていたように思う。上手，下手ということであまり評価されなかったから，なんでものびのびとかいていた。4年生頃からクレヨンが水彩絵具にかわるようになると，描き方，力の入れ方などとまどうことが多く，また転校して先生が変ったこともあって，絵をかくことに何かしら緊張を覚えるようになり，他の人の絵を比較し，自分の絵のまずさを意識するようになった。

○写生は主となっていて，しかも学校の周囲にかぎられていていたため，いやけがさして6年生の頃になるといやけがさしたものである。デザインのときの方がその点では面白かった。

○4年生まではほとんど指導らしいものは受けた覚えがなく，ただわからないまま我流でやっていた。5，6年のときには「瓦の色など一枚一枚ちがった色をぬれ」といわれたことがある。中学に入ったらかなり専門的な指導をうけたので，おもしろかったが，それでも指導はもっとくわしくしてほしかった。又教科書に載っていることしかやらず，もっといろいろ独創的なことをやりたかった。つぼなどをつくってやくとか，共同製作で大きなものをつくるとかできたらよかった。小学校ではありきたりのことを個人の才能にまかせてやるといった風であったから，どのようにやったらいいのかわからないままにすぎてしまったようである。

○図画工作にはそんなに力を入れてやる先生はなかったせいか。6年生になってからは少し興味があるようになった。これは先生が熱心であったためで，墨流し，吹き流し，その他霧吹きなども楽しくやったことを憶えている。ポスターの好きな先生でレタリングが楽しくなった。写生については屋根の色や木の色など個有色でないことについて指導されたものである。

○天気のよい頃には写生が多かった。月に一度くらいは，お話を聞いて，そのことについて思ったこと描いたものである。きめられたテーマについて作ったり描いたりした。昆虫が一つの例で，デザインのようなことも関連してやっていったようである。このようにして各学年の中から賞をもらう人が何人かいて，その作品が講堂の一段と高いところの壁にはられているようだった。

○図画も工作も友達よりは大へん遅いので，友達は仕上げてしまった頃でも，常に半分くらいのところしかできておらず，後はあせってただ適当に仕上げたようである。1年生のほかはいつも専科の先生に教わったので，いろいろな材料をつかって結構楽しかったと思う。子供ながらいつもふしぎに思われたのは，先生によって評価がかなりちがっていたことである。

○ほとんど教科書を授業中に使ったことはなく，自習のためにはひとりでゆっくりみたこともなかったように思う。好きなものを描くのにはあまり困らなかったようだが，自由をもてあましていたのは事実で，工作のときにはとくに好きなものをといわれても，何を作ったらよいのかわからなくて困ったものである。作品は今も保存しているけれども，授業中に仕上ったものは一つもなく，課外にひとりで作ったような

ものが多い。低学年においては，ものをゆっくりと正確にみるくせをつけ，絵を描くにしても，ものを作るにしても，一つ一つきちんとするのがよいと思う。

○作品を仕上げて出すと，その次の日の掲示板に優秀作品がはり出されたようだったが，自分がその中にはなく，おもしろくなくなったように思う。どんな判断にもとづいて掲示されるものが選ばれたのかわからなかった。みんなで競争させられ，一生けんめいにやったあとのむざんな結果をみて，くやしかった。先生は絵画指導にしろ何にしろ，ほとんどなにも指導らしき指導はなかったように思う。

○絵や彫刻を鑑賞することは好きだったが，描くことや作ることが苦手でできないのだ。絵の時間になると下描きを友達にして貰うことがあたりまえのようにしていたと思う。今思ってみると大へんな間違いだったと思う。美術というものは，常に生活の中に含まれている。それを無視することはできないことだと思う。教えることの内容はそのまま受け容れても，表現にはそのまま現われるものではなく，教えの内容を個人の能力で表わすのだから本当にむずかしいものだなとつくづく感じる。

○写生のようなものはわりあいに好きであったが，先生は個性伸長のためか，多くの時間を抽象的な絵を描かせたり，なにか独創的なものを作らせようと，けんめいであったと思う。低学年では粘土をもっても，何かモデルがあったが，空想的なものを作るときになると非常に困ってしまった。そして嫌になってしまった。美術やデザインなども全然空想ばかりではなく，積み重ねて，経験の中からでてくるものだと思う。努力のみだといわれながらも，先生の苦心されるようすはあまりみられなかったと思う。児童に不意に創造性のあるものをのぞんでも無駄だとしか考えられない。独自性の乏しい人間であっても何か徐々に身につけていくことのできる指導であってほしかった。

○その時間になると，エンピツや鉄や，クレヨンといった道具類をそろえるのに，家の人からお金を貰うことがいやな思いであった。道具をわすれてきたといって叱られたことが忘れられない思い出になっている。自分の持物と他人の持物との差がたいへん気になったもので，この教科の時間にはとくにそれが痛切に思われた。内容的には「自分は不得意である」という気持が常に支配的であったように思われる。賞状や賞品によって競争心をあふれたことも多かったが，そのことも嫌になった原因でもあろう。

○図画工作は主にクレオンを使ったものが多かったが，写生画が多く，デザイン的なものはあまりやった記憶がない。上級になって水彩絵具を使うようになったが，乾かないうちに違う色を使うと色がまざってきたなくなり，難しいものだと思った。写生のときは半ば遠足にいくような気分がして楽しかった。

○図画を描いたことばかり多くて，工作をやったのはあまりなかったように思う。工作は1，2年のときだったように思う。自分の読んだ話やことがらから，もっとも心に残った場面を想像して絵にしたこと，自分のみた夢を絵にすることなどがよくあったが，創造力と表現力とにむけて目的があるように思われる。

○他教科は何とか頑張れたのに図画工作の成績だけはいつも悪かった。いつもうまくいかなくてあせったものである。教科の地位が低かったように思うし，先生もいい加減だった気がする。先頃旅行して，素晴らしい紅葉の山をみた。あの時の感動は忘れることができない。あんな景色をさっとスケッチできない，表現できたらと思うことだったが，それにつけても自分の受けた教育がもっとしかりしていたら，今こんなことを思うこともないのに，今になって人間的に生きるということにおいて，小中学校で軽んじられていた教科の重要性を思う。

○受けた教育，特に技術が身についていない。決して才能があるとはいえないのに，私の積極性とか，ていねいさを認めてもらったように感じている。小学校では個人個人の表現の特質をみとめたり，それぞれの長所を伸ばそうとする意図があまりなかったように思われた。

○工作なんかは創造ということより，美しくしあげることが目的だったように思う。図画にもそのような傾向が強くあらわれていた。4年生のとき習字の時間に個性ということについて話されたが図画工作のときは一度もきかなかったと思う。いつまでも形にばかりこだわっていた傾向があり，彩画についてはうまくいかず，けちけちしていると思ったりしたものである。

○常に判定の規準のもとに受けてきたと思う。たとえば写生にいくと，絵具の使い方がよいかどうか，どの程度写実性があるかなどの規準である。自由におもいおもいに自己を思いきり表現しなさいといわれても，我々の感性の表現として理解されることなく，方法的なものや，手段的なものとして判断されてきたもののように思われる。興味と関心は自分が自由で自由な時間に好きなように，自己に忠実にかくときにあると思う。

○絵を描くことが好きでなかった理由を考えてみると小さいときの影響が多分にあると思う。自由な創造力がなく，ある一定の型にはまったものしかできなかった。色彩感覚があまりよくなくて絵はあまりすきではなかったが，砂あそびでいろいろなものを作ったせいか，彫塑の方が楽しかった。心の中で上手にかこうと思うとそれに捉われて型にはまった考しかできなかったように思う。小さいときの影響は今でもすべてに及んでいる。

○デザインが好きで，特に平面分割やポスターの好きだった理由は，自分の作品が廊下に張出されたことである。元来子供というものは一生けんめいにしたことが，ほめられるとそれまでは嫌であったものでも一転して大好きになったりすることがあるもので，時間のあるかぎり作品作りに集中したことや，どんな質問でもとりあげてくれた授業が今でも印象的である。

○小学校の高学年で想像画を描いた。参考資料として図鑑や雑誌，漫画などを持込み，友達と相談しながら自分なりの構図をつくるのである。そのためある意味では寄せ集めの，創造力の乏しいものとなるだろうと思われるが，経験してみると楽しいものであった。今の世の中のように情報があふれている中で，自分なりの選択をさせることにも意義があるのではないかと思う。

○元来，芸術とは個人的価値が強く，その評価もさまざまである。経験を語ることになるが，自分なりに学年によってかなり変動があったように思われる。ある学年では先生に非常にほめられていたが，先生がかわるとあまりみとめて貰えなかった。年によって自分の能力がそんなに揺れ動くなど考えられないことである。他の教科でもありうるかもしれないが，美術の評価はさらにむずかしいと思う。ロダンでさえも美校入試に三度も失敗したということでもわかるように思われる。美的情操の教育にまで5段階評価が用いられているのには疑問を感じる。

○低学年の頃は工作が多かったように思う。空箱をつかったり，糸まきをつかったり，竹ひご，ボール紙などでけっこう楽しく作っていたと思うが，図画のときには，あまり多くの色数を使わぬようにとか，黒い色でふちどりをしないようにといわれたことをおぼえている。一番印象的であったことは小学校1年生のとき，遊園地の絵をかいた後で，先生の評価によれば，絵の中の私が，他の子供たちと同じような大きさに描かれていることは，非常に子供らしくないということであった。一般に低学年の子は自分自身を他の人よりも大きく描くものなのだそうである。このときは，子供ながらにそんなことはどうでもよいことではないかと不満に思ったものである。

○小学校低中学年では評価は3で，この教科だけは他教科より悪く，やる気がしなくなっていたことは事実である。5年生のとき，ある作品を先生がさかさまにみて，その上に悪評をされたので衝撃は大きかった。描くことには憶病で，評価を気にするようである。中学に入ってからはいつも評点がよく4か5であった。特徴としては，黒をよく使った。明暗の効果があったというわけか。1年生2年生と先生は変られたが，よくどの先生からもほめられたものであ

る。私はさほど芸術性のある作品をつくったわけではないし，創造的な表現をしたとも思わないから，先生のほうが素人であったのかもしれない。

中学3年になって専門の先生に受持たれたとき，とうとう評点が2になってしまった。評価の規準はどこにあるのかしらと今でも疑問に思う。

○生来不器用で動作ものろく，きまった時間内で，あることに集中することにも苦手である。そのためこの教科の時間はのろわれた時間であった。慎重にていねいにゆっくり考えてやろうとすると時間がなくなってしまい，才能がないわけではないと思っても，結果として出来上った作品はみじめなものばかりであった。そのくせやけくそにいいかげんにやったものが，ふしぎにほめられたりした。きまった時間内に物事をやりとげるということは必要なことではあるが，創作活動の場合はそうでないことが多い。才能のあるものでもこのような経験から判断できることは，萎縮したり，劣等感を感ずることである。

○小学生のときの先生はすべて抽象画をかかせ，抽象形をつくらせる先生だった。画用紙も何色かの中から好きな色をえらび好きな色でかくことになっていた。何を描いているのかわからぬままに，わからぬものを描いていた。〝心の中にあるものを描くのだという〟その絵の描き方が私には重荷に感じられていた。毎週色のちがった画用紙だけをえらぶことにしていたが，それからさきは当惑していたような気がする。遠足の思い出，未来の生活といった題が与えられても，やっぱりとても描けないものだった。先生が抽象的なものが好きだからとか，あの人のこんな絵を先生がほめたからということばかり気にしながらかいたので，今でもあと味の悪い思いがする。先生としては好きな先生ではあったが，作品を今も保存していてみつめることがあるけれども，幼い心の表現としては，あまりにもみじめな結果のように感じられる。

○授業はとくに絵画が多かったように思う。静物や人物画をかいていた。そしてデザインに関することはほとんどやっていない。彫塑とか工作というのは夏休みの宿題や，学園祭に出すためにやったという程度である。今から考えてみると先生はあまりこの教科についての理解がなかったように思われてならない。図画工作の時間をつぶして国語や社会をやったことがあった。

Ⅲ　調査結果に関する考察

学生が受けた図画工作科や美術科の教育については具体的にその実情が示されている。綿密ていねいなものと大へん粗雑なものをとり除けば，いわゆる一般的なものとして素直に受けとってよいのではないかと思われる。よくにた内容の答は重複することをさけた。

(1)　学年の段階に応じた指導の努力点　こういうことがはっきり認識されていなかったために，むりな要求が指導者や両親の側にあって，そのために子供たちにこの教科への関心や興味を失わせる結果になっていることが明らかにされている。系統的な技術指導はあまり行われていない。

(2)　技法上の要点　この面の指導が乏しかったために制作についての成功の経験よりは失敗の経験を重ねる結果になり，この教科の時間がおもしろくなくなってしまうことがあげられている。調査Bには内容と技法の問題について別にとり出して調べたが学生は技法指導を望んでいるし，その必要性を述べている。この考は健全であり，心強くも思われる。しかるに一般の大人や指導者の中には創意工夫や各自の創造性が技法指導によって妨げられるか又は甚だしくそこなわれると思われている傾向がある。これは学ぶものの側に立っていないからで，児童，生徒や学生達がどのように技法又は技術指導を望んでいるかをみきわめなかったからで，このことは今日の美術教育の上に極めて重大であり，是正されねばならないことである。「思うようにうまくいかない」と思ったときに放棄することが多いのはこのためである。

(3)　性格のちがい。教師と生徒との性格のあう

あわないということは，他教科においてもありうることと思うが，思想感情が表面にでてくることの多いこの教科では，大人のほうが綿密周到な配慮をしていくのでなければならない。学級集団の中では，ともすれば個人に対する配慮のいきとどかない場合が起りうる可能性があるとも思うが，むりな押しつけになるよりはこのような場合，各人の創意を働かせうるだけの余裕が，時間的にも心情的にも必要である。結果を焦る，効果をいそぐ，というようなことがこうした問題の中心になっているようである。

(4) 時間の不足　授業の時間に果せなかったものは課外にその仕事を果たすか又は宿題として課せられるかになるようだが，もっとも困難なところが指導者のいない家庭へ持込まれる場合もあり，その上設備や用具も乏しく一そう条件の悪いところになることが多いので，宿題はできるだけ避けるのがよい。とくに工具を必要とする工作的な教材では危険がともなうことがあるからでもある。

(5) 評価について，評価が指導者によってちがうといっている。このことは仕方のないことのように思われているが，できるだけこのようなことがないようにしなければならない。つまり評価は目標と表裏一体である。児童生徒は目標を忘れることがしばしばある。ところが教師の設定した目標には無関心で，自分勝手に決めた方向に向って邁進するといった場面もある。このような場合，生徒が自己評価したものの予想と教師のマークしたものとに甚だしいひらきがあることがよくあるもので，こうした場合でも，評価は児童生徒の能力を伸ばすためのものなのであるから，慎重さが必要になる。

評価のための評価というのがこの教科では厳にいましめねばならない。結果主義にならないことである。

(6) 鑑賞について，義務教育を終るまでには代表的な名作について鑑賞と理解をもつことも大切にはちがいないが，それにもまして重要なことは近代芸術についての理解をもつことと鑑賞のしかたや態度を身につけることである。実社会に出れば制作に当る人間よりは鑑賞するほうの人間になるものがはるかに多いのであるから，せまい範囲の体験から広い範囲をもつ美術全体への窓口を開くためにはいろいろなジャンルのものにも入ろうとする気を塞いでしまうようなことのないようにしなくてはならない。はやくも中には偏狭に固まりかけているものもみられる。それには何よりも生徒児童の生活感覚や体験につながりのあるようなもの，心情的にも親しみやすいものがその対象として選ばれることであろう。芸術心は芸術によって高められる。鑑賞資料の整備は何よりも必要なことである。調査の中では残念ながらあまり行われていないのが実状のようである。又児童生徒の作品をとりあげて相互鑑賞することにも意義はあるけれども，彼等の創意を高くひき上げることはできない。すぐれた芸術品のなかから選ばれたものは児童生徒に納得を与え深い肝銘を得させるような資料でなければならない。この調査によれば Modern art の中でも Cubisme を経て展開される造形感覚の表出する作品についてはあまり認識が深められていない。単なる表面的な写実にはまることなく，各人の個性的感性にもとづく造形活動に関して深い理解をもつようにさせたいものである。セザンヌからの近代的な創造的思考は思考力と理解力のすぐれた学生たちには知的に納得いくまで指導される必要がある。彼等は又それを待ちのぞんでいる。

Ⅳ 結　論

A 基礎指導

誰しも他人を意識せず形を鉛筆で描いていたうちは，のびのびとかけていることが多い。子どもたちがアスファルトやコンクリートの路地に石や白ぼくで描いている大画面もなかには驚くほどいいものがしばしばあるが，それにみられる描線は大へん生き生きしている。この子どもたちがひとたび教室に入ったり，大人の表現の中にあると思ったときにもこのように生き生きした活動や，その表現ができるように継続させたいと思うことが多い。もっとも重要なことは線が生きていることであり，形を似せること

ではないということの認識が不足している。一般には，小学校の低学年ののびのびした活動がしばらくの間にその美しさや，よさを失なってしまうのはこのためのように思われる。鉛筆はその持ち方が文字をかくときに多くの機会と頻度があるため，文字書写のための持ち方と使い方が習慣化していつの間にか描画の場合にも全然工夫されないままか，あるいは紙面を手くびがこすって移動するような姿勢で使用される。鉛筆も筆のように長いものを高いところを持って使用することが必要なので，精密描写の場合をのぞけば文字書写のようないき方では絵画はできてこない。しかし一般学生はこのような習慣を堅持していて，相当な理解に達するまでは一度や二度の注意くらいでは，いろいろ鉛筆の持ち方や使い方をしようとはしない。鉛筆と紙とはいっても鉛筆にも紙にも種々様々ある。画用紙という名で一定の紙だけで終始してしまうものも相当数あるようにも思われる。過去の時代には色彩画の基礎として素描があったように永年続けられてきているが，そのことの是非はともかくとしても，鉛筆だけが素描材料として扱われすぎると思う。筆と墨で描く素描は近年教育面からは軽んじられすぎている。インクやマジックペンやサインペンなど種々のものがあるが，硯と墨でできる微妙な墨のよさは絶対に重視さるべきもので，筆についても各種，吟味さるべきものと思うし，製造についても積極的配慮がなければならない。なぜなら粗悪なものは使用には耐えないし，有効なものはひどく高価になっている。児童生徒一般の使用に供せられるものは いわゆる 大衆料金で なければ ならず，文化的なものにも教育的なものにも現状はあまりこの種の産業に配慮がないのではなかろうか。

次いで彩色については，色というものをあまりにも自由に無雑作に使いすぎる。こうした結果はどの色も有効に働かないようにしてしまうのではないだろうか。最近の道路や車で走ってみるといかに赤い色がよく使ってあるかがわかる。赤は目立つために看板にはよく用いられているのであろうが，このようにたくさん誰もが競って使ったら，お互に相殺するような結果になる。さわがしく強い色彩の面積が多くなる。街を行く人々は一そう疲労を多くすることにもなろうし，一つ一つのものも目立たなくなるばかりか，不調和からくる不快感が増大するばかりとなろう。色は一つ一つの役割をそれぞれ固有にもっているが，それらが全体の調和として生かされることが重要である。このことがあまりにも不徹底である。デザインの中に色や形の基礎をとり出して指導するところが設定されている，部分的な指導に終るのではなく，美しさは全体と調和してはじめて発揮されることを徹底するようにしなければならない。子どもたちのする描画の場合についていえば背景と無関係にものが描かれ，最後になって塗りのこされたところが無雑作にある一つの色に塗られるのをよくみうけるが，このときには背景はものとは無縁なものとなってしまう。今日の産業が周囲のことを考慮せずに発展したことや，諸文明が環境破壊を考慮せずに進められてしまった多くの事実も，こうした教育が多く，このようなみ方，いき方の脆弱さの中に胚胎していったことではなかろうかと思われるふしがある。又基礎指導の一例としてもっとも多いことは描画の場合に子どもたちのパレットをみれば基礎指導がいかに乏しかったかがわかる。つまりパレットには絵具を並べるところと調合するところの区分が必要であり，絵具を並べるにもおのずから色相の位置がきまってくるはずである。

いろいろな巨匠たちにも作家によって，個性的な配置はある。しかしそれぞれにある法則に従っているとみうけられる。殆んどのものができていない実状にある。パレットとは随時どこにでもその場当り的に色をおくためのものと考えているとしか思われない。したがって画面の中のある色彩が微妙に画面全体に照合していく効果や機能などとても考えるとは思われない。又色彩の混合や重色効果についてもさらに至難であろうと思われる。このようなことは小学校の低学年からすでに身についていなくてはなら

ないと思うし，もっとも基本的で基礎的な指導でなくてはならない。ほんの一例をあげたにすぎないが，このようなことの指導を強めても表現の自由をさまたげるものではなく，創造力を失うことにもならない。ある時期に至って，少しも興味をなくしてしまうことや，無関心さらには嫌悪感さえ抱かせる原因となっているのは教えることが乏しすぎたのではないだろうかと思う。ここでいう基礎とは，誰にも身につくようにすることがらをあげ，それの徹底につくすべきことであろう。

B　現代美術の指導

学生の実態調査にも表われてきているように，Jmpressionisme と Naturalism だけで60%をしめている Post-Impressionisme を含めれば73%にも及ぶ。これに反して現代美術はすべて好むと好まざるとにかかわらず Fauvisme と Cubisme の洗礼を受けているといわれているくらいであるのに，それに対する関心や興味は極めて僅少であるのが実状である。描写よりも造形そのものを重んずる近代絵画においては特に色や形の組立が根幹となるものである。先ず第一に Paul Cézanne のデッサンからみるべきであろう。「絵とはいかにあるべきか」ということをもっとも単的に理解するにはこれをおいてほかにないと思うほど，入門というかこの場合適切と思われる。はじめからModigliani（1884～1920）のような素描はいくらかむりであるが，セザンヌのものは誰でも理解しやすく又入りやすいと思われるものが多い。とくにこの人の作品には自画像や夫人，子供などのデッサンに適切なものが多く，みるものに親しみを感じさせる。又身辺にあるものを題材として，素描材料だけでさえも芸術的表現の可能性をみいだすためにも意義深いものがある。セザンヌの油絵については必ずしもすべての人が納得できるものばかりとは思われない。しかし，現代における写実の意義や造形性の理解のためには，有効なものが多いし，学生の理解しやすいものから順序立てて，次第に高次な芸術性や造形性へと導くことが必要である。生活の中から表現の題材をみい出すことからすれば，Pierre Bonrard（1867～1947）の何ものにもこだわりのない，安らかな憩を与えてくれる表現のしかたを学ぶことができる。素描といってもこの人の場合は忠実な写生ではなく，記憶による MEMO 帳のようなとらえ方が多くみうけられるから，一そうなごやかで，しかもその中に味わい深いものが印象深く描かれているようである。こうした作風は単なる写実とはいえない。なかんづく写生にたよりすぎていることの多かったことの改善にもその態度からも学ぶべきことがある。ボナールともっともよく似た作風のものは Edouard Vuiillard（1868～1940）で色彩感覚も小品においては傑出した才能をみとめられるが，食事をする主婦の姿，編物をする人，燈火のある室内など又婦人の肖像やいろいろなポーズの人物なども親しみの深いものがある。日常生活の中にある美しさを発見的に描いている作画態度とともに学ぶべき分野が多い。ボナールの仕事やヴィヤールの仕事から，モヂリアーニの仕事への理解へと進めるのが順序であろう。なぜなら単純化の方向とよりつよく誇張していくような Déformer がより明瞭にみとめられる。近代美術の特質ともいわれるデフォルメが理解され納得されやすいかたちでとり入れられると思う。自然を基礎として造形していく場合に，作者の主観によって強調したもののあり方が，飛躍をもってされては了解されにくい。このような重大な技法は順序立てていくのでなければ真の意味が理解されないであろう。ついで Pablo Ruiz Picasso（1881—1973）のデフォルメが「アヴイニヨンの娘たち」という作品によって考察されることだろう。キュービスムへの導入には効果的ではないだろうか。現世の快楽もいつかは死の世界になりかわってしまうことを暗示して，どんなに楽しいはなやいだ生活であっても，豊かな体格の美人たちも，どくろの変身であるといったようなことを表現しているといわれるが，日本の木版画に示された平面性はマチスにもピカソにもその他多くの近代作家によって試みられたにちがいない。

Cabisme への入門には多少の難解さはあってもこうした順序で考察するのがよいと思われる。対象を基本的な幾何学的な形態におきかえていったとされている Georges Braque (1882—1963) の作品よりはピカソのものがはるかに生命感のあふれたものとみなすことができる。青少年にはピカソの作品の方がその意図を汲みとりうるものがあると思う。ピカソ芸術の全貌は及び難いものとしても，ナチ軍がスペインの町ゲルニカに無差別爆撃を加えた状況からそれを題材としてパリ万博のスペイン館壁画を依頼されて描いたという Guernica はもっと理解されると思う。人間や家畜の苦悩の姿を劇的な表現にした最高傑作といえる。彼の人間的な憤りがその造形力によって比類のないものにまで高められていると考えられる。Fauvisme については児童画の方がむしろ生命感にあふれているものもあるので，共通点が多く共感を受けるものが多いと思われる。学生の実際をみればこの調査にもみられる如く写実的な傾向が強く，一般に元気がない。しかもそれが対象物のとりこになってしまうため，自主的な取捨選択をしないまま，困惑している状態にみえる。野獣派の中心的存在としては Henri Matisse (1869—1954) があげられているが，比較的に絵具のうすい傾向のものが多く，色彩効果の方向に純粋になっていくので，はじめからマチスをとりあげるよりは，オランダの Kees van Dongen (1877—　) が，原色的傾向が極めて力強く表現主義的なものがある。青少年にはドンゲンの人物画のほうがよく理解されると思う。デフォルメもよくできていてことさらなあくどさがない。風景画については Mauvice de Vlaminck (1876—　) と Albert Marquet (1875—1947) によることがそれぞれの特質もあり，意図をせん明に示すことができると思われる。前者の強烈な筆触と彩色の状況と後者の色彩の気品と有効な線的表現は絵画の芸術性を一そう深めることに役立つものとなろう。これらの作家のほかに Othon Friez (1878—1949) と軽快なタッチの Raoul Dufy (1877—　) と Pievre Laplade (1875—1931) が，児童生徒にもよく理解されやすいものとしてあげることが適当である。ラプラードの場合は作品に詩情があふれ，気品のある温和なものが多く，やさしさにみたされている。素描のものは油絵とはことなった快いリズムがあり，素直で純なものが通ってくるように思われるからである。印象主義がものの内面性を表現しようとしたとしても表現主義 (Expressionisme) のモティーフの内面性にはるかに及ばない。こうした意味あいからも色彩の強調と形態の誇張からも，児童生徒の躍動的な表現を高めるのにふさわしいものが多い。表現主義にはいろいろな定義づけが行われているが，ここに表現主義の作家作品の中から取捨選択して鑑賞させることによって表現力向上のための動機づけ乃至技法上の参考に活用させたい。必ず青少年の心を奮起させる大きな刺戟となると思うからである。ドイツの大立物となった Emil Nolde (1867—1950) やノルエーの Edvard Munch (1863—1944) よりはオーストリヤの Oskar Kokoschka (1886—　) の仕事が風景にも人物にもすぐれたものが多いし，理解しやすいものが多いと思われる。自然から取材した表現であっても，対象そのものに従属させられることなく，ココシュカの示している造形性にまで高めることが必要である。

フランスの Expressionisme の代表的な人物とされている Chaim Soutine (1894—1943) は画面の中に生命感があふれ，デフォルメや色彩にも著るしく表現の強さが感ぜられる。

Julius Pascin (1885—1930) は極めて洗練された技法をもっており技法上からも学ぶべきものが多いが彩色法は彼独特の軽妙さがあるので一沫の哀愁をふくめているものの表現にはまことに適わしいもののようである。このようにして表現力乃至は表現技術，技能をもふくめて積極的に高めることが必要である。学ぶもののおのずから発見することを期待して各人の自由にまかせておくのでは教育効果は期待されないと思う。

C　教科書の充実

戦後の教育は教科書を教えるのではなく教科書で教えるといわれてきた。図画工作科や美術科では参考資料としか思われていない。これではあまりにも贅沢な扱い方というものである。教科書は今や義務教育段階では無償となり，国民の税金によってまかなわれ，すべての児童生徒に支給されている。それの中味やその取扱いはもっとも効果的なものであるはずであり，そうしてゆく努力こそ重要である。街々にあふれている週刊誌や月刊雑誌など，大人の娯楽を目的としたものと比較してみるとき，わずか一ケ年間中学校35ページ，小学校32ページに押込まれた教材の窮屈な編集ぶりでは誠にお気毒といいたいほどである。なぜ義務教育だけが，こう圧縮され，切詰められねばならないのか。必要なものさえ省かねばならないのかと思う。指導要領の中ではD鑑賞の中で「現代生活で失われがちな人間性の向上のために，美術の果たす役割について理解すること。」とあり，「美術的な能力を生活に生かす態度や習慣を育てる。」と述べている。又Cデザインの中では(2)の「伝達や使用のためのデザインができるようにする。」のところで「社会的，公共的な条件も考えて構想を練ること。」と述べてある。これらのことが今日重大な危機をともなって我が国及世界全体のなかでも苦慮されている。これまでの教育の中でこれらの重要なことがらが学ぶものに深い肝銘を与えるまでには扱われていなかったと思う。図画工作科や美術科で得た能力が単に個人の要求や嗜好的な余暇利用の具として扱われた傾向が強く，よき市民としての社会的資質向上のために身につけていなければならない美的判断力や，美術一般に関する常識の欠除とも思われる。すくなくとも現在の指導要領にかかげられている目標を達成するためにも，さらにはもっと大きく，生活環境の改善能力を高めるためにも，教育者と被教育者のつながりを深め，教育効果をあげる助けとなるのは教科書である。基礎能力を育成することなくしては，自由解放的な創造や，児童生徒の発見的自発学習のみに期待していくのでは，創造性豊かな教育も情操豊かな教育も期待することが到底できないことである。現在の教科書をみれば少くとも頁数は2倍にする必要はあると思うし，内容もさらに整備充実すべきであろう。鑑賞資料の精選と巾ひろい参考資料の提供のためにはさらにその必要が感ぜられ，大人の作品ばかりでなく生徒作品を掲げる場合でも，作者の意図などを記述することや巨匠たちの言葉なども載せられることが必要である。すべてをアート紙にしている現在のような編集にも一考を要すると思うし，豊かな文化国家としての我が国のあり方のためにも，国民必修の教科書が大衆の娯楽雑誌類にかけられる莫大な費用に比べてはあまりにも微々たる存在であると思われてならない。同一頁の中にいくつもの色刷が雑居することは，不調和をかもし出しており，まことに残念なことである。次の世代に捧げる教科書としてはもっともっと立派なものにしたいし，終生役立つ必携のような図画工作科や美術科の教科書にしなければならないと思う。教科書の中には新しい文化の創造に役立つ能力の指導を中軸とすることは勿論だが，現在の青少年の思想感情に即応していく態度ばかりでなく，すくなくとも20世紀の文化の理解をはじめ，過去の偉大なものへの理解にも充分役立つような教科書こそが必要なのである。

主な参考文献

世界美術全集26　平凡社
Herbert Read　A CONCISE HISTORY OF MODERN PAINTING　Thames and Hudson
中学校指導書　美術編　文部省
小学校指導書　図画工作編　文部省